「戸惑いながらの被災者支援」

生活安全部（女性）

16 年前の阪神・淡路大震災。当時小学五年生の私は、高速道路や家屋が倒壊する様子を、テレビ画面を通して遠く離れた福島で見ていた。避難所で活動している多くのボランティアを見た私は、「私も社会のため、人のためになることをしたい。」と思い始めていた。それから、自分の将来を考えていく中で見付けた夢が、警察官になることだった。

警察官になるという夢をかなえ、充実した日々を送っていた平成 23 年３月 11 日、東日本大震災は発生した。津波が町を襲う映像が私の心を不安にさせた。福島にいる家族からどんなに「大丈夫」と言われても、その不安は消すことはできなかった。どんなに空が晴れていても、私の心の中が晴れることはなかった。そして、被災地のためにできることは何かと考えた。募金などをしつつ、「もっと他にできることはないか」と思っていたところに、被災者支援活動特別派遣の話がきた。生活安全部の女性警察官 10 人で編成され、３月 31 日から４月９日までの 10 日間の派遣であった。派遣先は私の故郷、福島。

久しぶりに帰郷した私は言葉を失った。思い出の町は津波に襲われ、何もかもなくなっていた。家も、車も、電車も、線路も何もない。あるものは瓦礫の山だけであった。中学時代、仲間と汗を流した思い出の体育館は、避難所になっていた。

「私を育ててくれた福島のために！」という強い思いはあるのに、「果たして私は何ができているのか？」という戸惑いの毎日だった。戸惑いの中、脳梗塞の後遺症で左半身が思うように動かない女性に会った。一緒に避難してきている家族にも迷惑を掛けていることが申し訳ないと話した。私は、「焦らずゆっくり一歩ずつ歩いていけばいいですよ。」としか言えなかった。そうすると女性は、「若い人に励まされちゃって…」と言いながら涙を流した。その涙を見て、私はそれまで堪えていた涙があふれた。先が見えないという現実と、その女性の気持ちを考えると、涙を隠すことはできなかった。それと同時に、その女性にほんの少しでも元気を与えられたという、うれし涙でもあった。涙をぬぐい、手を握りながら、「ここは桜の有名な場所だから、暖かくなったらゆっくり歩いて桜を見てくださいね。」と言い笑顔で別れた。その女性と出会ってから、徐々に戸惑いは消えていった。。

被災者支援活動最終日に、同世代の女性と出会った。避難所への要望を尋ねると、「毎日何もすることがないから本が読みたい。ここにあるのは子どもの本だけなんです。大人向けの本が欲しい。図書館があれば図書館に行きたい。」と言った。避難所にこの女性の要望を引き継ぎ、図書館への地図を渡すと、「毎日

ボーっとしていたから、お巡りさんが話し相手になってくれてうれしかった。ありがとう。」と女性は言ってくれた。その時、それまでの戸惑いが全て消えた。この一言は私の救いとなった。私が福島に来た意味を感じた瞬間だった。この女性の言葉で喜んでいる私は、ただの自己満足かもしれない。しかし、それでもいい。誰かのためになったのだから。幼い頃の夢を実現させることができたのだから。

故郷の風景は変わってしまった。しかし、変わっていないものもあった。福島県民の温かさだ。だから私は、福島県民の人柄の良さを誇りに思い、これからも夢を追い続けようと思った。応援してくれる家族、そして福島のために。

一緒にがんばっぺ！　うつくしま福島！！